

カラー 4巻 36分

ともしびを高く

企画・社会福祉法人 鶴風会 後援会

協力・社会福祉法人 鶴風会父母の会
東京小児療育病院
みどり愛育園
東京都目黒区立不動小学校
東京教育大学附属桐ヶ丘養護学校
身障友の会
脳性マヒ児を守る会
社団法人 東邦大学医学部 鶴風会
東邦大学

製作・ヨネ・プロダクション

映画完成の御挨拶

社会福祉法人鶴風会後援会

会長 近 藤 龍 一

この度、社会福祉法人鶴風会が運営しております肢体不自由児施設の東京小児療育病院及び重身のみどり愛育園の子供達の懸命に努力療育している様子をつぶさに追ったドキュメンタリー映画「ともし火を高く」がやっと完成、晴れて上映の運びになりました。

いま映画をみながら十年という長いようなこの年月の種々の出来事が走馬燈のように頭の中をめくり感無量でございます。

やっとこの病気に対する早期療育の効果が少しづつでも認められるようになり、初期の目的が皆様方に理解されるようになった事を喜ぶと共に、多くの方々温かい善意に心より感謝しております。

専門家の間でも困難といわれるこの仕事を民間の鶴風会が手がけて十余、設立に努力された先輩、その後の運営に、時に自宅の診療を休診にして飛び廻っておられる役員の方、日頃子供につききりで日常のすべての世話に献身的な病院の方々、そしてこの仕事に御理解くださり、折にふれ御援助くださる後援会の方々、沢山の方々のお蔭で病院の子供達は恵まれた環境で適切な看護、訓練をうけております。

障害を負った子供を持つ周囲の人が諦めてしまうことなく、少しでも早い時期に適正な治療、訓練を受けるようにと願いつつ、これ

からもこの病気を社会に正しく理解していただけるよう努力してまいる心算でございます。

この映画製作に当たってヨネ・プロダクションの方々永い間の御努力、又上映に際しまして御協力いただきました劇団新制作座の方々に厚く御礼を申しあげます。

何卒、今後とも御援助をお願いしますと共に映画完成の御挨拶といたします。

お礼のことば

社会福祉法人鶴風会

理事長 本 明 登志子

後援会の皆様、後援会発足以来、社会福祉法人鶴風会・東京小児療育病院・みどり愛育園に多大の御援助と御厚情を賜わり厚くお礼申し上げます。

またこの度、東京小児療育病院の創立十周年に際し「ともし火を高く」と題して病院の実態の映画を製作していただき、本日試写会開催のはこびとなりましたことに対し心からお礼を申し上げます。

創立十周年記念事業の一つとして病院の記録映画を製作したいと云う計画がありましたが、多額の資金を必要とするため中止のやむなきに至っていましたが、後援会の皆様より暖い手をさしのべていただき、職員並びに関係者一同の願いをはたさせていただく

ことが出来ました。

後援会の皆様は約三年の長い間、映画製作の資金集めに東奔西走され、また映画製作関係者の皆様の真剣なきびしい製作態度には、ただぐ／＼頭の下る思いでございました。

「ともし火を高く」をごらんいただくと、脳性麻痺の子供達が自分の障害を克服して懸命に運動機能の獲得に努力している姿が最も印象的であると思いますが、この病気の発生原因の多くを解明できない現在、障害児とその御家族に対し理解と連帯の声援をおくつていただければ幸いです。

映画に出ている子供達は脳性麻痺児の中では比較的障害が軽い方で、多くの脳性麻痺児は障害がもつと重うございます。また学校に行けて教育を受けられても、今後社会に出て生活していくためには、まだ／＼多くの問題があります。これらの問題が解決出来るまで、皆んなの問題として考えていかなければならないのではないでしようか。

東京小児療育病院は東邦大学の医学部の卒業生によって、昭和三十九年より開院いたし、幼少の脳性麻痺児の早期療育にとりくんでまいりました。昭和四十五年に重症心身障害児施設、みどり愛育園を併設いたし、多くの方々の御力添と御援助により、また職員協力をより本日に至ることが出来ました。

社会福祉を国策の一つとしているわが国におきまして、このような子供たちに対する御理解と連帯を、なお一層深めていただきたいとお願いいたしてやみません。

映画を作り終えて

社会福祉法人鶴風会

後援会員

小	喜久子
柳	浜子
日	野
中	里
	玉子

東京小児療育病院の十周年を記念して幾つかの記念事業が発足しました。

後援会もその一つであり、映画「ともし火を高く」もその一つであります。

三年の永い間、製作にあたった「ヨネプロダクション」の方々は、脳性小児麻痺や身障者の問題には、はじめてとり組むのですから、その間の御努力と御苦労は並々ならぬことであつたらうと推察いたします。

想えば昭和三十五年、東邦大学医学部（旧帝国女子医専）の同窓会である社団法人鶴風会の理事長龍知恵子先生の提唱で、医師として世の中に役立つ仕事を目標に、同窓生が相寄りこの仕事を選びました。

はじめはその基金作りから、土地の確保のため関係官庁への請願、当時の貧しい国の福祉行政を指摘しての啓蒙運動等、皆で西に東にかけまわる日々でした。

ついに大蔵省、厚生省、東京都等の御理解と御援助を得て、武蔵村山市に「脳性麻痺研究所」身体障害児のための「東京小児療育病

院」を開院する運びとなり、この種の福祉施設としては我が国初めての病院が、昭和三十九年四月に発足しました。

よう／＼国の行政も社会福祉の方向に向けられるようになり、又社会一般にも障害児に対する理解と関心が高まり、多くの方々の善意に支えられ、この十年間に障害児の早期発見、早期治療開始による療育効果は高く評価されるようになりました。

此の記録映画の中で、ハンデイを背負った子供達が一つの動作を行なうことに如何に一生懸命であるか、見守る看護職員のねばり強いくり返しくり返しの指導、殊に重症児への長い時間をかけて食事の世話をする看護婦諸姉の姿には深く心打たれます。

「ともし火を高く」……十年前ひそやかにともされた小さな灯が十年の歳月を経て少しづつ光を増し、次第に高きかかげられるようになったことは本当によろこばしいことです。

私共はこの火を絶やすことなく守り続け、次の世代の方々にうけつがれて行くことを願っております。

皆様の手の一つ／＼にともされた火が障害児と、その御家庭、殊にその御両親の心に明るい希望の灯となりますよう念願する次第です。

心身障害児に対する世間一般の理解と関心は少しづつ高まって参りましたが、施設の拡充や職員の確保、言語に絶する忍容と奉仕にあげられる関係職員の待遇改善など、問題は山積して居ります。

向後も皆々様の御理解と御支援を賜ります様お願い申し上げます。

強く明るく

東京小児療育病院、みどり愛育園父母の会

竹 中 広 夫

我国における福祉行政は欧米諸国に比べますと、未だ貧困の域をでませんが、十年前と比較しますと経済成長と共に福祉行政も充実の一途をたどってまいりました。その反面、人々の間から福祉の心というものが失われつつあります。そういう中にありまして日頃より皆様方からお寄せ頂きます御厚情と御支援に厚く御礼申し上げます。

東京小児療育病院も十二年の歴史を歩んでまいりました。一口に十年と申しましてもそれは筆舌に表わしがたい苦難の道のございましたでしょう。ある時は資金難に苦しみ、ある時は職員不足になやみ、それらをのりこえて今日あるのは各先生方並に職員の方達の御努力の賜と深く感謝致しております。

さて私には七才になります男の子があります。現在「みどり愛育園」に入園しております。この子が生まれました時、親のみが味わえる感激と喜びにひたつたものです。まさか不自由な身体になろうとは夢にも思いませんでした。

何が不幸なことかと云いまして我が子が不自由な心身の持主であるということくらい親にとりまして辛く不幸なこととはございませ

ん。代れるものなら代ってやりたいと願う親は私ばかりではないでしょう。周囲の祝福をうけて生まれながら、不幸な星を背負ってしまつたわが子を哀れともいとおしいとも思いながら、なぜ私どもだけがこんな不幸に見まわれなければならないかと、この不幸な「生」を恨み、神をのろいました。まち中で障害児を見かけましてもお気の毒だとは思いますが、何か別の世界のこのように思っておりましたのに、まさか自分がその世界の真只中におかれるとは人の運命とはわからないものです。順調に育ってまいりました子が、首のすわる時期になりましたも首がすわらず、不安な気持ちをいだきながら大学病院や有名病院に行き診察して頂きましたが、どの病院でも何でもないそのうちに首がすわつてくると云われ安堵しておりましたが、まもなく高熱に見まわれ、急ぎある大学病院に入院しました。一ヶ月余入院してその間にいろいろ精密検査をしました結果、この子は脳性マヒですと宣告されたときは突然奈落の底につき落されたように目の前がまっ暗になりました。病室にもどりましても意識を失つた人間のように呆然としており、かたわらには妻が幼な子をだきしめ声もなくいつまでも泣いていました。

不幸な親がたどりますように、私どもも病院から病院へ、医師から医師へと渡り歩きました。少しでもその子をよく云つてくれる所はないかと、あわい望みを持ちながら……、しかしどこも絶望的な診断ばかりでした。そして、まわりまわっているうちに東京小児療育病院に入院することができました。もの云わぬ子をまた手足のきかぬわが子を見て途方にくれる毎日でしたが、病院に入り同じ障害児をもつ多くの親たちとめぐり会い、また多くの心豊かな人々のはげましを受

け私どもの心にも少しづつ明るさがよみがえってまいりました。

こうなつた以上は運命に逆らつたところでよいことはない、運命にしたがつてその命じるままに重荷を背負い、できる限り軽くなるよう努力するのが私どもに与えられた使命だと悟り、強く明るく生きる事が子供にとつても私どもにとつても幸わせなことであると思ひました。施設と云いますと何か暗いイメージがわきますが、東京小児療育病院並にみどり愛育園は武蔵野のおもかげを残す緑多き村山の地にありまして常に太陽の光に囲れております。

建物は明るく設備は整い、そこに働く職員の方々の明るさに私どもは大いに元気づけられております。十年の歴史をふまえて、より一層発展されん事を願ひ私どもも協力していくつもりでございます。創立以来御後援下さいました多くの方々にも重ねて厚く御礼申し上げます。

“ともし火を高く”を見て

財団法人脳性マヒ児を守る会

理事・事務局長 吉 永 弘 子

「女医であり、母である私達の使命だと信じて、随分困難があつたけれど、それを乗り越えて、とうとう出来上つたのよ。」と、開院当時の理事長、龍知恵子先生に病院を見学させていただいたのが、もう十二年前のことになりました。当時一般の人々の間では「脳性マヒ」と言う病名を耳にすることすらめずらしく、障害児の多くは、家の奥に隠され、ただ家人の愛にすがつて、社会から隔絶された生

活をおくっていた時代でした。

この病院の設立の目的は、早期発見、早期療育、即ち、より幼いうちに病気を発見し、正しい治療、訓練を行なうこと。それにより出来るだけ障害をおさえ、更に残された機能が充分に活用出来る様に正しい訓練を重ね、学令に達した時には、少くとも特殊学級へ通学出来るまでに快復させたい、と言うことにあるのだと伺いました。

それから十余年を経過した現在、この病院も養護学校、みどり愛育園、を加え障害児の療育施設として当時より一まわりも二まわりも大きく成長いたしました。この映画の中に、元気に地区の小学校に学ぶ 秀子 ちゃんを見ました、いつか病院を訪れた時に、補装具をつけ、更に松葉杖を使って、ころんでは起き、ころんでは起き、懸命に歩行訓練をしていた幼い頃の 秀子 ちゃんの健康な姿を思い出し、思はず目頭があつくなりました。まさか一人で通学が出来るようになるうとは……よくこ、まで頑張ったこと、と心の中で喝采をおくりました。

あとにつづく多くの皆さんも 秀子 ちゃんに負けずにはげんで欲しいと願うばかりです。訓練に対する本人の努力は、もとよりたいへんなものですが、それにも増して、それぞれの障害に対する専門の先生方の、共になさるご苦労と愛情には頭が下がります。又間接的にも多くの方々のお力添えがなければ成立って行かないと言うことも忘れてはならないと思います。この映画にある様に、退院後の彼等は、地区の学校へ、養護学校へ、そして何年かの後には社会人として世の中に巣立つ日が参ります。設立当時五才だったお子さんはもう十七才になっている筈です。

地区の学校で、何の屈託もなく生活する 秀子 ちゃんが、何年

かの後にも社会人として今と同じ明るさをもって生きていてほしいと願っています……。確かに「脳性マヒ」と言う病気が全くと言って良い程、理解されていなかった十余年前の目的は、学校、にあつたかも知れません。そして本人の、又先生方のご努力によって、それが 秀子 ちゃん 奥野君のように現実になんて来ませんでした。

そうした今日では、彼等が社会人として明るく生きられる社会が必要となりました。それは、社会の人々が「脳性マヒ」と言う病気を正しく理解して下さることによって可能になると信じます。その為に、是非、出来るだけ多くの方々にこの映画を御覧いただきたいと思ひます。そして早期療育の成果をたしかめていただきたいと思ひます。又お子様が「脳性マヒ」と診断されても、決して希望をすてず、先づご両親が勇気を出して、正しい療育をす、んで受けられますことをおす、めいたします。ハンディを負ったお子さんを隠す時代はもう昔の話になりました。

こんな話を聞いたことがあります。自分は父親から「お前は目が見えなくて可哀想だ」と聞かされて、はじめて自分が可哀想な人間なのだとなりました。と、

身体的なハンディを負ったお子さんの、心のハンディは、家族や社会の人々の偏見から生み出されるものだと言うことに気付かなかねばならないと思ひます。社会の人々の考え方、接し方、これが彼等の心のハンディを左右するとしたなら、障害を特別視しない社会を作ることが望ましいと思ひます。

この映画の中に出て来たお子さん達が社会人になられた時、より

明るい社会である為に、私達一人一人が、ともし火を高くか、けて、行こうではありませんか……。

当会では身体障害児を対象に毎月第三日曜日に「愛の診療」（無料診療相談）を行っております。お問合せは電話☎(三九)七番番

演出にあたって

杉山正美

「私はこの子供達と心が通い合うことが出来るのだろうか、」
去年の六月、或る事情からこの仕事の演出を引き継ぐことになったとき、私の心のなかにこの疑問が重苦しい重圧としてのしか、つていました。

人と人が心の通い合うことは、お互いの人生のなかでの同じような苦しい体験を相手を持っていると感じる、このことが最も重要な要素になるものだと思います。

障害のないものが障害のある人の心が分かることが出来るのだろうか、

この問題から私は第一歩を踏み出すことになったのです。

病院に通い調査をつづけるなかでこの心のなかの無力感はむしろ拡がりつづけていました。

しばらくたってから或る日、撮影の打合せをするために病院の先生の案内で、訓練の現場を見ることになりました。

必死に床から立ち上がろうとする子供、転んでは起き上り、転んでは起き上る子供、この子供達のさまざまな障害と、訓練のやり方

を先生の説明を聞きながら見ているうちに、言いしれない感動が私の胸にこみ上げて来ました。

言葉にはならない「なにか」が私の人生の経過の分析出来ない部分と触れ合ったと感じたのです。

同時録音の出来ない、ノイズの多いボロなカメラ、人手不足のなかの録音。しかし私は、与えられた条件のなかで可能なかぎりのフィルムをこゝにそゝぎこむことにしました。

そして私に出来るたった一つのことはこの情景をまだ脳性マヒについて何も知らない私と同じような多くの人達に伝えることだと思つたからです。

この訓練の場面は、映画の常識から言うと、八方破れの編集が随所にあります。

これはこの現場の雰囲気や可能なかぎり伝えようとする私の止むに止まらない気持ちの表われなのです。

例えば、転んだ子供が次の画面では起き上ってしまったっている場面などがしばしばあります、これは編集の常識からすると時間の経過を無視したおかしなことになるのです。

しかし、撮ったフィルムのなかにその時間経過を補うものがない場合その時間を無視しても、再び訓練に挑戦する子供の姿を出すことが、より大事なことだと考えたからです。

この映画をつくるときもう一つ私の心につきさ、っている問題がありました。

丁度この再撮影の打合せが始まったころ、或る重症の身体障害者の幼い娘さんが、家族の留居中に父親から食事が与えられないま、

亡くなってしまったという事件が新聞に報じられました。

私もし同じ情景におかれた場合一体どうするのだろうか、

この疑問がもう一つカメラの眼をお母さん達に向けることになりました。

恐らくカメラを避けたがる人が多いのではないかと考えた私の心配は全くくつがえされてしまいました。

進んで協力して下さったお母さんは勿論のこと、許可もなしにとつたお母さん達の顔の美しさ、明るさは、私の心のゆがみを打ちこわしてしまつたのです。

訓練を終えて二つを出た子供達は二つの雰囲気そのまま持ちつづけているのだろうか、紫都さんや奥野君を学校に訪ねて取材した動機はこんなところがありました。

紫都さんの場合には担任の先生が全く自然な形で紫都さんに接していて、その雰囲気教室中に伝わって紫都さんを取りまく環境の良さを強く感じました。

また、奥野君がサツカーのエースだったのには驚きました。画面のなかで奥野君が、シュートをしはばやつたのはこちらから演出したのではなくて自然の姿なのです。

しかし、奥野君の本当の姿を見たのは彼の詩をみたときです、映画にのせたのはその一部です。

勝つときもあれば敗れるときもある、奥野君のたゆまずすむこの気持はむしろ体の健康なものに欠けている人間の心の強さがはぐくまれていました。

まだこの子供達の世界のほんの入口に立つたにすぎないかも知れ

ませんが、与えられた条件のなかで可能なかぎりのすべてをつくしたというのが私のこの映画を作りおえての実感なのです。

「ともし火を高く」を企画して

後援会副会長・東邦大学教授

五 島 嗟智子

“身障”のある子供達が、歩こうとしたり、物を持ち上げようとしたりすることに、けん命な努力をしている姿をみると、自分のことが楽々ときる五体健全、健康であるということは、一体どういふことなのかと考えてしまいます。

今若さと健康を満喫していても、何かの機会に“身障”となるかも知れない。そうでなくても年をとって足が不自由になったり、眼が見えにくくなったりすることを思うと、誰もが“身障”と無縁ではないことに気がつくでしょう。

この映画作成中、ヨネ・プロのスタッフの方々と共に、さまざまに試行錯誤や、討論をくり返しながら、私達が日常無意識のうちにやっている動作の一つ一つに、これほどの努力をしなければならぬ子供達の真剣な顔を追いかけて過した三年の間に考え続けたことは、“身障”は私達と無縁ではない。それどころか誰でもが“身障”の可能性を負っているということでした。

この映画の作成にあたり、多くの方々の御助力をいただきました。今まで未知であった方々からも、この仕事を通して輝やくような善意と、素朴で力強い援助をいただいたことに深く感動しております。